

自ら考えなければ進まない学習で 達成感を経験させて自信を高める

東京都板橋区立板橋第一小学校

子どもが自分で学習内容を選び、各々のペースで学習を進める「自由進度学習」を研究している板橋区立板橋第一小学校。
当初は教師の間に「本当に学びが成立するのか」という不安もあったが、生き生きと学ぶ子どもの姿を目の当たりにして研究の機運が高まっている。

取り組みのねらい

- 「自分の力で出来た」という体験によって、主体性や自己肯定感を高める

取り組みの内容

- 自分で学習内容を決めさせることで、学習に責任感を持たせる
- 自分のペースで学習を進めさせることで、理解や定着を図る
- 「自分が考えなければ学習が進まない」という状況をつくり、主体的な行動や思考を促す

取り組みの成果

- 子どもが主体的に考えるようになり、発想の広がりも見られるようになった
- 子ども同士のかかわりが増え、自分に自信を持つ子どもが増えた
- 教師の教材研究に対する熱意が高まり、子どもを見る視野が広がった

S c h o o l D a t a

◎1874(明治7)年、板橋学校として開校。2011年から3年間、板橋区指導力向上特別研究指定校。研究主題は「一人一人の子どもが生き生きと学ぶ姿が見える授業づくり」。2013年4月、新校舎が竣工。



校長 中川久亨先生

児童数 357人 学級数 12学級

所在地 〒173-0013 東京都板橋区氷川町13-1

TEL 03-3961-0100

URL <http://www.ita.ed.jp/edu/ita1es/>

公開研究会 2013年11月22日(金) 予定

● 取り組みのねらい

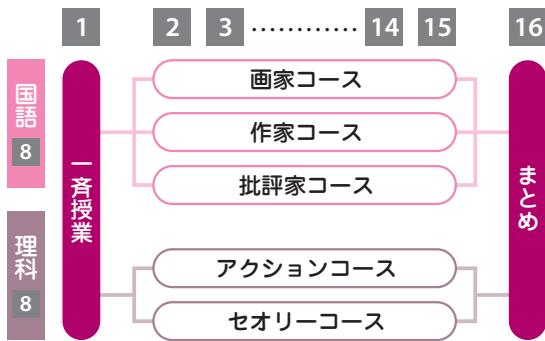
「自分で出来た」という実感を
自信や自己肯定感につなげる

「この授業スタイルで、本当に子どもたちが学びに向かうのか、最初は不安でした。ところが、いざ始めてみると、子どもは今までなく生き生きとした表情を見せ、授業を楽しみにするようになったのです。そうした子どもたちの姿を目の当たりにして、研究を深める気持ちが高まりました」と、板橋区立板橋第一小学校の中川久亨校長は振り返る。

同校は、2011年度から板橋区の研究指定を受け、一斉授業を大切にしながら、一部

授業で高める自己肯定感

図1 自由進度学習の進め方 例：5年生の国語・理科



上記の場合、1時間目に学習内容の説明があり、国語から1コース、理科から1コースを選び、2～15時間めの授業で両方が終わるように計画を立てる。そして、2～15時間めは課題に取り組み、16時間めは学習の成果を発表する *同校の資料を基に編集部で作成

の単元で「自由進度学習」を取り入れている。これは、1教科もしくは2教科の単元を同時に扱うこととし、子どもは教師が設定した複数のコースから1つを選び、例えば、授業時間が各教科8時間だとしたら、最後の授業までに2教科両方のコースを終えるように自分で計画を立て、学習を進める授業スタイルだ。最初に行うコース説明と最後のまとめは斉授業だが、その間の授業は子どもが自分で作成した学習計画に沿って、単元全体を見通しながらゴールを目指す(図1)。

例えば、12年度の5年生では、国語の古文と理科のふり子の学習を2学級合同で同時に進行させた。つまり、同じ時間に同じ教室で、国語を勉強する子どもと理科を勉強する子どもがいることになる。どの時間にどちらの教

科を学習するかは子どもに任せており、前半は国語に専念して全てを終わらせてから理科に取り組み子どももいれば、国語と理科を交互に学習する子どももいる。苦手な教科により多くの時間を割くことも出来る。

授業中は、教室を出て、好きな場所で学習してもよい。子ども同士が話をして笑い声上がることもあるが、他の子どもにも迷惑を掛けていなければ、教師は注意しない。定着を確認する教師のチェックポイントはあるが、あくまでも子どもの自主性に委ね、「このままでは終わらないから、そろそろやらな」とと気付くまで辛抱強く見守る。

このように自由な状況を子どもに与えることのねらいは、どこにあるのだろうか。研究主任の海野初枝先生はこう説明する。

「この授業では、子どもが自ら学習の内容や進め方を決め、教師の力を借りずにゴールにたどり着きます。『自分の力で学習できた』という体験は大きな自信となり、自己肯定感を高めることにもつながります」

この授業は、学校のシンボルであるイチヨウの木をキャラクター化した「イチチー」にちなんで、「イチチー学習」と呼んでいる。

取り組みの内容

自分から考えなければ 学習が先に進まない状況をつくる

子どもは、イチチー学習をどのように受け



板橋区立板橋第一小学校校長
中川久亨 ながわ ひさみち
「子どもが伸びる教育を実現するために、教職員が元気で明るく働ける環境をつくるように心掛けている」



板橋区立板橋第一小学校
海野初枝 うの はつえ
研究主任。5学年主任。主幹教諭。「一人ひとりの子どもに居場所があるクラスをつくりたい」



板橋区立板橋第一小学校
宮本彩 みやもと あや
3学年主任。体育主任。「子どもの心に寄り添い、クラス全員が『学校は楽しい』と思える学級経営を目指す」

止め、学んでいるのだろうか。

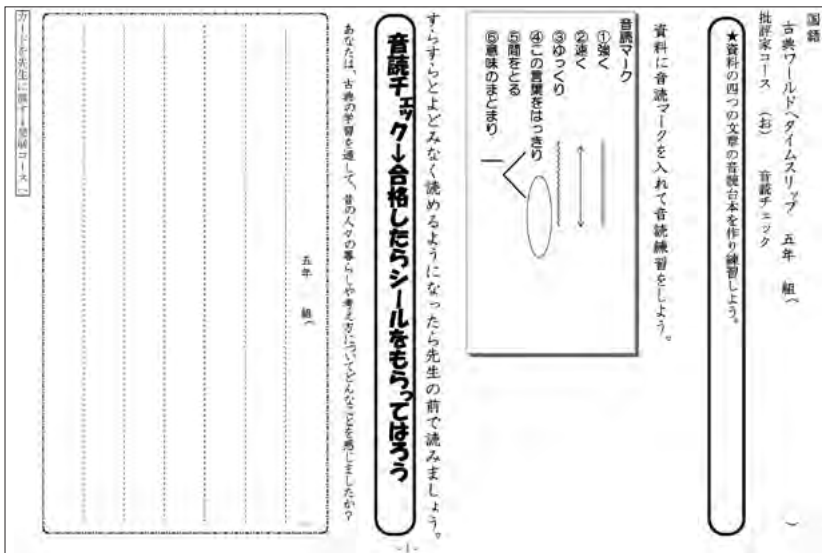
子どもが最初に考え、判断する場面が、コースの選択だ。5年生の古文では、物語を読んだ絵巻物をつくる「画家コース」、エッセイを書く「作家コース」、批評的な意見をまとめる「批評家コース」の3つとした(図1)。

「自分で学習内容を選ぶのは、子どもにとって難しいことです。『どれが楽しそうか』『早く終わりそうか』『友だちは何を選ぶか』などさまざまな思いが渦巻きます。そのように思いながらも自分自身で決めることが、『選んだ以上は最後までやり通す』という主体的な学習に結び付きます」(海野先生)

コース選択後は、教師が準備した「学習カード」に沿って学習を進める(P.12図2)。学習カードは1時間ごとにあり、コースによつ

*プロフィールは2013年3月時点のものです

図2 5年生国語・古文の「学習カード」



「学習カード」は子どもが自分で学習を進められるように工夫している*同校の資料をイラストを削除して掲載

て内容は異なる。教師は複数の教科書を参考にして必ず理解してほしいポイントを抽出して学習カードを作成する。

「学習カードは学びの道筋となるもので、子どもがどのような思考をするかをイメージしながら作ります。易しすぎると十分に考えないうちに終わってしまい、難しすぎると先に進めない子どもが出てきます。コースごとの学習カードの作成は大変ですが、学習の正否を決めるので最も力を注いでいます」（海

野先生）

学習カードで学びの道筋は示されるが、自分で考えなければ学習は先に進まない。それこそがイッチー学習の肝といえる。

ある子どもは、一斉授業では静かに座っているが、教師の話をおそらく理解できていないようだった。しかし、イッチー学習では、自分で一つひとつ考え、理解し、進める必要がある。そのため、その子どもは自分から分からないことを何度も教師に聞きに来た。そして、確認のテストで満点を取って大いに自信を付けたという。

クラス内の学習の序列から自由になり学び合いが活性化

主体的に考えることにより、子どもは発想はどんどん広がっていく。例えば、早く学習を終えた子どもにも、発展学習として、教師が『源氏物語』の那須与一の物語で登場した弓矢を作らないかと提案した。すると、同時に行っていた理科のふり子を弓矢で射る「那須与一ごっこ」が広がった。国語と理科の融合により、学びが深まった例だ。

「イッチー学習では、教師が与えたものを超えて、新しいアイデアが生まれます。自分たちが生み出した学習は、心に深く刻まれる体験となります」（海野先生）



写真 5年生の古文で画家コースを選んだ子どもの作業風景。同じ学習を進める子どもの間に自然と学び合いが生まれている

自分で考える学習に子どもたちは前向きに取り組む。3学年主任の宮本彩先生は次のように話す。

「子どもはイッチー学習を待ち望んでいて、『次のイッチーはいつ?』とよく聞きます。自分で考えたり、友だちと学び合ったりするのが楽しいからでしょう」

学び合いが促されるのも、イッチー学習の特徴だ。学習が進むにつれて、自然と子どもたちが集まり、学び合う姿が見られるという。普段はかかわりが少ない男子と女子が話し合ったり、2学級合同で行う高学年では他クラスの子とも話し合うことも多い。

イッチー学習は、一人ひとりの計画によっ

授業で高める自己肯定感

て学習進度が異なる。そのため、理科を先に進めていた子どもが、国語を先に進めていた子どもにも、既習の学習内容を教えるということも起きる。中川校長はこのように話す。

「理解の早い子どもが必ずしも先に進むわけではありません。そのため、クラスの学習の序列が崩れることが、イッチー学習のよいところですよ。普段は理解するのに時間が掛かる子どもが、いろいろな子どもに教えるといった逆転現象のような場面も見られます」

● 取り組みの成果

最も変わったのは教師 教材研究や子どもの方見に変化

研究を通して最も変わったのは教師かもしれないと、宮本先生は感じている。

「以前は、『教科書に載っているから教えるければ』という意識が強かったと思います。それが、どのような発問をすれば子どもが自ら動きたくなるのか、言葉を精選するようになりました」

イッチー学習では、教師は事前の教材研究やコースづくりを注ぎ、授業中は一人ひとりの姿をじっくりと見て評価する。そのため、子どもの見方が大きく変わったことも変化の1つとして、海野先生は強調する。

「授業中にあまり意見を言わなくても、実はよく考えているなど、子どもの意外な一面を発見することが多くなりました」

授業中に子どもを褒めることも増えた。

「一斉指導では見付けられなかった良さを褒められるようになりました。そうしたことも、子どもの自信につながっています」(宮本先生)

課題の1つは、独力では学習が進められない子どもへの対応だ。現在はヒントを与えるなど個別指導をしているが、どうしても自分で動き出せないことがある。どのような支援をすれば、自分で考え、達成感が抱けるようになるのかを協議している。

2つめは、子どもにどの程度の自由を与えるかだ。今は床で寝ころんで考えることを認めるなど、かなりの自由を与えている。しかし、子どものためにどこまで許すことがいいのか、更なる検討が必要と考えている。

「『何でもあり』の状況では收拾が付かなくなる恐れがあります。あいさつや声の大きさ、持ち物など、守るべきルールを教師間で共有し、子どもに浸透させたいと考えています」(中川校長)

また、自由進度学習は、新しい概念を学ぶことには向かず、調べ学習や体験学習に向いている。自由進度では難しいと感じる時は、一定の時間を一斉授業に戻すなど、取り入れる場面を見極めることも大事だという。

子どもの明らかな変化に、教師は手応えを感じている。更に研究を深め、主体的な学びを促すための手立てを検討していく考えた。

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

教師をやる気にさせることが、校長の役割の1つです。そのために、タイミングよく、前向きな声掛けをするようにしています。人間は本来、面倒臭がりなものですし、教師は多忙です。それでも「中川校長に言われたら仕方ないな」と、前向きに捉えてもらえる存在でありたいと思います。ただ、上意下達では動く気なくなりますから、教師との会話を大切に、同じ目線を持てるような人間関係づくりに努めています。

校長 中川久亨先生

ミドルリーダーの役割

先生方と教材づくりの大変さを共有することを大切にしています。若手の先生が研究のイメージをつかめない時には、具体的に伝えるのも私の役割と考えています。

研究は多くの先生がかかわることで、より面白いものになります。例えば、教材づくりをあえて職員室の皆から見える場所で行うことで、「何に使うの？」などと声を掛けてもらえます。そのようにして学校のみなを巻き込んで研究に取り組んでもらうことを大切にしています。

研究主任 海野初枝先生